

21世紀を展望した医療

筑紫病院外科教授 有馬純孝



先進二十四カ国の一人当たりの医療費の比較をみると米国は日本の二・二倍、カナダは一・六倍、日本は上から十四番目であり、しかも、その中には福祉費も入っている。福祉費は医療費ではないのでこれを除くと日本人一人当たりの真の医療費は先進国の中では二十番目にランクされるという(朝日新聞社説)。決して高くないのである。しかし、毎年一兆円ずつ増え続けているという。厚生省はこの医療費の膨張に対処するため、国家的施策としての医療費削減に取り組んでおり、医療環境は日を追って窮屈になっている。大学病院といえども保険診療の制約

は当然うけねばならず、また私立医科大学の財政的基盤を支える入学生定員の削減はダブルパンチとなっている。この状況の中で二十一世紀に向かっている大学病院像を描いていかねばならない。大学病院は過去において、教育、研究、診療を必須の条件としてきたが、国民の健康の向上に貢献するために最も大切なことは医師の養成であり、社会のニーズに対応した良医の育成を通じてこそ、社会にユニークな貢献ができるのである。しかも、目前に迫った二十一世紀の医療に係わる社会的条件を展望してみると、高齢化社会、医療ニーズの多様化、疾病構造の変化がま

ずあげられる。医療を提供する側よりみると医学の進歩、高度医療技術の開発、医師数の増加、開業医師の高齢化、医療施設収容力、機能分化と連係、等が考えられ、しかも、今後ますますマイクロエレクトロニクスの進歩によりニューメディアの開発をもたらし医療分野にも大きな変革をもたらすことが予想され、医療の新たな展開に対処できる医療情報システムの構築をはかる必要がある。大学病院としてこれらに対応できるように準備が充分であろうか。これらのことに対応しつつ、良質な医療を効率的にサービスすることが要求されている。良質な医療とは患者の人間性を尊重した個々の医療で、患者一人ひとりの個性に対応したきめ細かい医療が行われるべきものであって、標準化された医療では通用しない。つぎに機能分化および連係する医療で、日進月歩の医学や医療技術の進歩発展に追いつける医療で、医療短大など

救命救急センターが出来そうだ！ ささて…

内科学第一教授 西丸雄也



平成二年五月発行の医師会の福岡県医報「今月のテーマ」には福岡県選出自民党衆議院議員八氏の「二十一世紀への医療の展望について」の挨拶文がある。その根幹にあるものは平成二年一月に厚生省健康政策局がだした「二十一世紀をめざした今後の医療供給体制の在り方」である。国民の総選挙で自民党が過半数を占める現状がつづく限り、このビジョンは今後の日本の医療行政の方向を示している。

床病群、老人保健施設について規定している。他方、わが福岡大学で行なわれている将来構想フォーラムの中間報告を学報第一二二号でみると、第三分科会の生涯スポーツセンター設置構想、第四分科会の救命救急センター、看護学部、診療放射線学部の新設など厚生省のビジョンに沿ったものであるが、長期療養病群、老人保健施設、長期療養病群、老人保健施設、展望は出ていない。「発展途上病院」福岡大学外科学科の視点からみれば致し方ない事であろう。学報にあるように第四分科会の最大案件は救命救急センターであり、既にその建物の基本設計が、研修医に対する教育は極

し、卒前、卒後教育および元医師会の生涯教育とリンクして研修ができるような施設を備え機能させるようにすべきである。次に人材の育成と確保が主要課題である。このことは、卒後教育と関係して来る。卒前教育については医学部当局で議論されることであるが、卒後教育については、昔のインターン制度と何ら変わるものではなく、かえって悪くなっているようにさえ思える。誰かがきちんと責任を持って、明確にされた目標を提示し、そこに到達するための指導および評価をすべきであろう。このことは現在、施行されつつある認定医、専門医と繋がっていることである。

「親心・子心(3)」

— 研修医の皆様へ —
整形外科学助手 浅川 康司



早いもので福大を卒業後九年が経過しました。医学部入学より通算すると十五年以上たっていることに今さらながら驚いている今日この頃です。簡単な自己紹介をしますと、私は本学医学部第四回の卒業(昭五十六卒)です。学生時代はテニスをやりました(本当は中洲で遊びすぎて)。四年生を二回やりました。で、どちらかといえばベケ学生でした。今もベケ指導医ではないかと思っています。現在のところ教育面では、SGT及び研修医の指導を行っており、臨床面では主に脊椎外科をさせていただいています。今回は、元研修医の立場及び現在の立場より感じている事を述べてみたいと思います。まずは、元研修医の立場から研修医の皆様にいろいろと大学側へ一言。大学で六年間

常職な医師が育つのではないかと危惧するのです。経済的に安定し、一般社会人として自立・自覚し社会常識を身につけてこそ全人的な医師たり得るのではないかと考えます。少し長くなりましたが、元研修医の遠吠えとして親心から述べさせていただきます。さて現在の立場から、先輩から後輩へのお願として、研修医の皆さんは、安い給料ながらも雑用に追われつつがんばっておられると思います。しかし必要な知識・経験がまだ足りない訳ですから、まずこれらを修得するには、大学病院ほど研修に適したところはないと思います。まずは専門的な知識・技術・経験等を積極的に身につけてゆく事が大事であろうと思います。それらの医師としての基礎を身につけたあと、できれば同時に一般社会人としての常識をはずれない様になっていただきたいと思えます。自分の研修医時代を思い返してみると、諸先輩に色々と厳しい御指導やおしかりを受ける事ばかりでしたが、それは全て自分の勉強不足や常識のなさが原因であったように思います。先輩方の教えを後輩に受け継いでゆく事が、ヒポクラテスの時代からずっと続いている医学の道なのだとすれば、我が母校福岡大学の発展も新しい研修医の皆さんの双肩にかかっているといっても過言ではありません。今後の皆さんの基礎となる重要な研修期間を共に働き、時に助け合い、共に学ぼうではありませんか。各自が福岡大学の看板を背負っているのだという自覚を持って、有意義な研修を過ごさず、得たものを後輩に伝えてゆく事が重要だと思えます。そして患者さんの気持ちがかかる人間味のある医師になってほしいと願っています。未熟者が偉そうな事ばかり書いて申し訳ありませんが、私自身も今後共研鑽を重ねてゆくこととお許し願いたいと思えます。

とセンター部分は二階にあり、ベッド数三〇〇、CT室、X線撮影室、高圧酸素室、熱傷患者洗浄室などを備えた標準的設計である。今後に残された問題はその運営である。行政サイドの救急医療対策事業実施要項には、運営方針として、初期救急医療施設及び第二次救急医療施設からの転送患者を受け入れる事、臨床研修医、レジデント等に対する救急医療の臨床教育の場とする事がうたわれている。御存知のように、わが福岡大学病院には既に救急部が存在する。そこに搬入される患者の疾病は、この四、五月をみる限り、消化器系が三〇％、脳神経系と心循環器系が三〇％、残りは外傷、呼吸器系、その他と比較的偏りはない。しかしその運営はベッド数が僅か一〇と少ないこともあって、必ずしも全臨床科によるものではなかった。医員に対する教育は行なわれて来たが、研修医に対する教育は極

経外科、整形外科、泌尿器科、心血管外科、健康管理科から若干数が入り、治療方針の決定並びに母教室との連絡役を兼ねながら、短くとも二年間の勤務が望ましい。医員も教育を受けながら母教室との連絡役となるために、上記臨床科から広く参加して欲しい。研修医の教育は上述したように、行政サイドの目的の一つである。研修二年目以上記臨床科はもとより、その他の科からも少なくとも年間一名四カ月間のローテーションを基本設計とする考えは如何であろうか。ベッド数三〇に教育職員九名、医員一〇名、研修医一〇名が妥当な線であろう。次に後方ベッドの問題がある。新たな建物の二階には手術部が拡張される。それによって外科系病棟の回転率はよくなる。当然、救命救急センターから外科病棟への転棟はより容易になるであろう。ところが内科系病棟の状況には

自己紹介

平成元年十一月以降に昇格又は赴任

筑紫病院外科教授

有馬 純孝



鹿児島県久島に生まれ、九大を経て、昭和五十年六月に福大病院外科第一に入局しました。

志村教授のもとで消化器癌の外科と炎症性腸疾患(クローン病、潰瘍性大腸炎など)の外科に取り組んでいました。ところが、昭和六十年七月一日より福岡大学筑紫病院開設に伴い、外科部長、助教授として赴任してまいりました。四方を歴史ある山々(天拝山、四王寺山、宝満山、基山)に囲まれ、太宰府に近接して設立された福岡大学筑紫病院も紆余曲折を経て、平成二年七月一日で満五年を迎えます。医師会との関係改善、管理棟設立、院内改造、増床問題、

脳神経外科助教授

岡 一成



昭和六十二年一月一日九州大学より赴任し、四年目に脳神経外科助教授に就任しました。脳腫瘍の中核形成するものが多く、腫瘍内容を線路の面から検査すると、プラスチック・アクチベータ・インヒビターが多く含まれていることが判りました。その意義について考察している段階で、ものが主流でしたが、今後の検討課題としては、利谷教授の薬疹・接触皮膚炎・脱毛症、林助教授の真菌症・化学熱傷・皮膚潰瘍の治療、一木講師の病理学・水痘症などの領域に基礎的研究成果が期待されます。今日注目されているアトピー性皮膚炎の治療についても、教授、助教授とも興味があり、診療面で検討が加えられ、学会や講演会での成果発表が盛んであり、日常診療は橋本・柴田両助手が中心になり若手をよく指導して大過なくスムーズに行なわれ、今後は研究活動への意欲が大いに期待されます。

教室紹介

福岡大学皮膚科学

一九七二年四月以来、現在まで十八年が過ぎました。当初は、樋口謙太郎先生が医学部長と病院長を兼務されたため、利谷教授が教室を主宰され、新入医員が一名おられたのですが、その後医局長も少しずつ増えて、末永先生(現産業医科大助教授)、旭先生(現同教授)なども相次いで赴任していただきました。また、皮膚科開業、辻先生(解

剖学第二)皮膚科開業)や吉塚先生(開業)などが在籍しております。林講師は一九七九年に日本医科大学より着任し、一九八一年十月旭教授の後任として昇格し、今日におよんでいます。一木講師は一九八七年に九州米大学より着任しました。現在、橋本・柴田両助手筆頭に医局員の数も九名となり教育・研究・診療もよく充実してまいりました。研究内容は臨床を主体とした

ある。脳外科医でこの方面の理解・研究をしている人は世界的にも少なく今後発展させる研究領域とされている。福大にきて発展させたのが、脳室鏡の臨床応用の研究である。オリンパス光学の協力により、観察用が2.2mm、治療用が4mmのFlexible Fiberscope を作製し、脳室内病変を観察するにともなう、水頭症の治療に応用している。従来のシャント手術は体内にシリコン・チューブを埋設していたため、異物反応のため機能不全を起こすことが多かった。そこで、シャント・チューブを必要としない脳室鏡下での手術を行っているが、本邦では福大のみで行える方法です。中脳水道狭窄症には中脳水道形成術、中脳水道閉塞症には第三脳室開窓術と脈絡叢凝固術。次は正常圧水頭症に対して脈絡叢凝固術の効果も期待される。脳室鏡下での手術をFlexible Endoneurosurgery と呼ぶ。

恩師の口癖は、「世界一は世界一だが日本一は世界で何番目か判らないぞ」と、これを心のよりどころとしてやっています。福大の皆様には今後とも迷惑をお掛けすると思いますがよろしくお願致します。

昭和四十九年鳥取大学を卒業。九州大学眼科教室に入局。昭和五十八年から七年間、産業医科大学にいました。そのため診療方法など産業医科大学での遣り方が染み着いていて、こちらの方法に慣れるのに苦労しています。また、住居は北九州(産業医科大学のそば)であり、通勤時間は長いですが、高校以来の汽車、バス通学を楽しんでいます。

昭和五十二年九大第二内科消化器研究室に入りました。主任は八尾恒良先生でした。以来師弟関係が続いてまいりました。昭和五十五年八尾先生が福大第一内科に転出された後、間断なく指導を受けてまいりました。今回筑紫病院で直接指導頂けるということで、また新たにファイブを燃やしています。研究面では消化管疾患の診断学、治療学を主体として

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十二年九大第二内科消化器研究室に入りました。主任は八尾恒良先生でした。以来師弟関係が続いてまいりました。昭和五十五年八尾先生が福大第一内科に転出された後、間断なく指導を受けてまいりました。今回筑紫病院で直接指導頂けるということで、また新たにファイブを燃やしています。研究面では消化管疾患の診断学、治療学を主体として

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

昭和五十七年福岡県で出生。五十二年長崎大卒業後、福大小児科に入局。二年間の研修後、本学産学化学第一教室に研究生として移りました。ここで松岡雄治教授をはじめ、諸先輩方から親切に実験の指導を受け、組織培養や免疫化学の基本的な技術のいくつかを習得出来ました。少年老い易く学成難し、とは私のためにある名言か、居心地の良さもあり、生化学教室には六年四月間在籍しました。六十年十月に小児科に帰局し、一年半の病棟勤務を経て現在は、小児の膠原病、代謝・内分泌疾患の診療を担当しています。

昭和五十四年我が福岡大学を卒業し、小田嶺一教授の指導の下に研修しました。その後、福岡通信病院、九州労災病院、九州厚生年金病院に出張し一般小児科の臨床研修をまた久山療育園にて重症心身障害児の臨床研修を経て昭和六十二年福大に戻りました。専攻は小児神経学特に電気生理の分野です。昭和六十年に産業医科大学神経内科学教室村井美教授で辻眞講師に誘発電位の基礎を学ぶと共に、福大では満留昭久教授の指導を受けました。正中神経刺激における短潜伏時性感覚誘発電位で小児においてはエール電位が2峰性であることに注目し、この現象が末梢神経の成熟に起因する事、成長に伴い単峰化していく事を報告し学位論文となりました。何故かという疑問から始まった研究の過程は自分にとって教訓的でした。現在他の誘発電位にも拡大しており教室の発展に尽くしたいと思っております。趣味はテニス。しばしば研修医と間違われますが十歳を頭に二女一男の父親です。

昭和五十六年福岡大学を卒業し、第二内科に入局。二年間の臨床研修、一年間の出張後、荒川教授の御指導を得、米国クリフランド・クリニック Dr. Fouad のもとで約三年間、高血圧性心臓病と食塩に関する研究に従事しました。犬の心臓を扱ったのが緑で、帰国後、循環器を専攻し、諸先生方の御指導のもと、ようやく臨床にも慣れてまいりました。日曜日の朝のジョギングと時々聴くラジオ英語会話が趣味のようなものですが、語学、特に国語は大の苦手です。文章ではいつも頭を抱えています。米國でかじったゴルフも、一向に腕があがらないままクラブは部屋の隅でホコリをかぶっています。元来、狭く深くより、広く浅くを好む性格ですが、心機を中心に研究できたらと思っております。

機会を与えられ、羊を使い胎児循環の研究をすることができました。学位論文は「Fetal Uptake of Intra-amniotic Digoxin in Sheep」で取得しました。胎児への薬物治療は、母親への薬物投与により経胎盤的に行なわれているのが現状で、その効果が不十分なのが多く、羊水中への投与が可能かどうかを検討したのが今回の研究です。趣味はパソコンをいじるのと釣りで、NECの98シリーズの信者であつた私も米國留学の際にマッキントッシュの魅力に惹かれ、マニアになってしまいました。福大にもマッキントッシュ信者が増えつつあると聞いており、情報交換が楽しみです。小児科講師

大学へ出張できることになり、楽しみにしています。小児科講師

(三頁へ続く)

第八十四回 医師国家試験 合格者と入局先

平成二年四月七日、八日に 行なわれた第八十四回医師国 家試験に本学から百四十八名 が受験し、百十一名が合格し た。合格率は七十五・〇%で あった。	合格者の研修先は(福大病 院研修生は科名のみ)次のと おり。	野元 康行 筑紫病院脳外 部 林 亜紀 眼科 原田 優子 内科二 春野 政虎 大学院生一 平田 昭二 耳鼻咽喉科 平塚 昌文 産医大外科二 廣田 修 小児科 藤井 寛子 産医大内科二 古川 敬一 筑紫病院内科 堀 浩一郎 麻酔科 松尾 文恵 外科一 三上 公治 外科二 南野 淳 長大内科二 三根生和明 愛媛大内科二 宮城 千里 耳鼻咽喉科 宮原 佳江 内科二 三好多佳子 帝京大眼科 村上 正彰 外科一 室原 由理 整形外科 森 真由美 麻酔科 山内 正 精神科 山内 紀子 内科二 山口 満喜子 京都府立医大 内科一 山下 太郎 整形外科 黄 勝博 外科一 山道 正代 内科一 山道 光雲 眼科 山本 竜 広大整形外科 吉武 圭輔 内科二 和田 秀一 広大外科一 石田 清和 内科一 岩田 郁 内科一 岡 幸三郎 皮膚科 岡本 育 麻酔科 木脇 祐俊 鹿大内科三 楠本 隆 長大小児科 小玉 正太 外科一 高尾 聖二 脳神経外科 種子田洋史 泌尿器科 宮尾 洋志 大阪市立大泌 尿器科 江口 明 麻酔科 田川 雅浩 精神科 田原 久史 内科二	永野 淳子 麻酔科 長野 祐一 鹿大整形外科 長浜 隆司 鹿大内科二 永光信一郎 久大小児科 鍋島 茂樹 九大総合診療 部 野元 康行 筑紫病院脳外 部 林 亜紀 眼科 原田 優子 内科二 春野 政虎 大学院生一 平田 昭二 耳鼻咽喉科 平塚 昌文 産医大外科二 廣田 修 小児科 藤井 寛子 産医大内科二 古川 敬一 筑紫病院内科 堀 浩一郎 麻酔科 松尾 文恵 外科一 三上 公治 外科二 南野 淳 長大内科二 三根生和明 愛媛大内科二 宮城 千里 耳鼻咽喉科 宮原 佳江 内科二 三好多佳子 帝京大眼科 村上 正彰 外科一 室原 由理 整形外科 森 真由美 麻酔科 山内 正 精神科 山内 紀子 内科二 山口 満喜子 京都府立医大 内科一 山下 太郎 整形外科 黄 勝博 外科一 山道 正代 内科一 山道 光雲 眼科 山本 竜 広大整形外科 吉武 圭輔 内科二 和田 秀一 広大外科一 石田 清和 内科一 岩田 郁 内科一 岡 幸三郎 皮膚科 岡本 育 麻酔科 木脇 祐俊 鹿大内科三 楠本 隆 長大小児科 小玉 正太 外科一 高尾 聖二 脳神経外科 種子田洋史 泌尿器科 宮尾 洋志 大阪市立大泌 尿器科 江口 明 麻酔科 田川 雅浩 精神科 田原 久史 内科二
--	--------------------------------------	--	--

教室 便り

学位取得

次の方は、平成元年十一月
十三日付で、福岡大学より医
学博士を授けられた。

田代 方民 (内科学第二)

論文名「A fast Fourier transform analysis of coronary reperfusion induced ventricular fibrillation and the modification by dibutyl cyclic AMP in a cat model.」

西田 哲朗 (外科学第一)

論文名「肝臓細胞癌の形態を有する新しい胆管癌細胞株の樹立とこれを免疫源とする単クローン抗体の作製」

吉村 茂昭 (外科学第一)

論文名「クローン病36例の外科的治療成績と再発様式について」

鬼村修太郎 (心臓外科学)

論文名「超低体温低流量体外循環の全身及び脳代謝に及ぼす影響」

野田 萬里 (麻酔科)

論文名「帯状疱疹患者におけるリンパ球サブセットの変化」

中村 豊 (健康心理学)

論文名「職場における精神障害者の発見と予後」

渡邊 法明 (解剖学第一)

論文名「Fiber arrangement of the hepatic capsule. A scanning electron microscope study.」

宮本 康嗣 (薬理学)

論文名「Effects of baicalin on the release of slow-reacting substance of anaphylaxis from guinea pig lung and the leukotriene D₄- or prostaglandin F_{2α}-induced contractions in guinea pig trachea.」

松本 進 (精神科)

論文名「Fetal uptake of intra-amniotic digoxin in sheep.」

矢野 浩二 (整形外科)

論文名「自己機能からみた境界性人格障害の研究」

山本 浩一 (精神科)

論文名「美保(小児科)における尿路感染症における抗菌剤の予防投与について」

池田 信博 (佐医大総合診療部)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

齋藤 昌彦 (宇治徳州会小児科)

論文名「肺腺癌(薬理学)におけるアセチルコリン放出抑制機構とadenosine受容体ならびにCa²⁺チャネルの関与」

帕爾哈提阿都都 (薬理学)

論文名「腺皮ならびにその主成分synephrineの気道における抗leukotriene作用ならびに胃粘膜保護作用」

今田 岳男 (広大整形外科)

論文名「胃悪性リンパ腫ならびに反応性リンパ性過形成の臨床病理学的検討」

栗田 輝久 (精神科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

前原 潔 (麻酔科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

小田 洋英 (眼科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

屋宜 宣守 (琉球大内科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

田代光太郎 (外科二)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

長野 康人 (九大内科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

坂本宏郎 (未定)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

松島 弘明 (国立長崎中央病院精神科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

今田 達也 (心臓外科学)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

山本 正昭 (脳神経外科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

小原 悟 (内科学第一)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

2, 6-bisphosphate の変化に関する実験的研究

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

HLA class II genes

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

論文「開心術後の上部消化管出血及び穿孔発生要因に関する臨床的研究—特に胃酸および消化管ホルモンを中心に—」

論文名「開心術後の上部消化管出血及び穿孔発生要因に関する臨床的研究—特に胃酸および消化管ホルモンを中心に—」

松吉 哲二 (心臓外科学)

論文名「三尖弁閉鎖不全に対する強めの縫縮による効果の改善」

若本 英明 (整形外科)

論文名「長距離走者の走行軌跡に対する基礎的及臨床的研究」

薄原 光義 (整形外科)

論文名「Ca²⁺ and Sr²⁺-sensitive ATPase activity of slow skeletal myofibrils in comparison with fast skeletal and cardiac myofibrils.」

ム、ストロンチウムイオンに対する遅筋筋原線維ATPase活性。—遅筋筋原線維、心筋筋原線維との比較

論文名「ム、ストロンチウムイオンに対する遅筋筋原線維ATPase活性。—遅筋筋原線維、心筋筋原線維との比較」

大塩 善幸 (眼科)

論文名「シリコンオイル注入眼の合併症とその対策」

伊東 博司 (泌尿器科)

論文名「虚血性腎障害に対するホルモノールホルムン酸の効果に関する研究」

松本信一郎 (産科婦人科)

論文名「Charakteristics of dopamine receptors involved in prolactin and oxytocin secretion and yawning behavior.」

Occurrence of yawning and decrease of prolactin levels via stimulation of dopamine D₂-receptors after administration of SND 919 in rats

論文名「Occurrence of yawning and decrease of prolactin levels via stimulation of dopamine D₂-receptors after administration of SND 919 in rats」

丸田 嘉郎 (脳神経外科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

丸田 嘉郎 (脳神経外科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

井原 裕二 (健康心理学)

論文名「潰瘍性大腸炎患者の末梢血における活性酸素産生能、産生阻害能およびsuperoxide dismutase (SOD) 活性」

石井 龍 (泌尿器科)

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

平成元年度福岡県医師会賞

論文名「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」

海外留学

平成元年十一月以降の海外
留学または海外から本学への
留学者は以下のとおり。

① 研修先②目的③期間
①カナダ オントリオ州
②「Biosynthesis of human macrophage colony-stimulating factor (CSF-1)」 ③1990. 1. 16~1. 22. ④病理学第一

①アメリカ Division of Nephrology, Children's Medical Center, Medical College of Virginia, Virginia Commonwealth University ②腎疾患と代謝 ③89. 7. 19. ④6
①カナダ プリンスエドワード島
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④3 (予定)
①アメリカ テキサス大学
②生体膜の情報伝達機構の研究
③89. 11. 2. ④2年間 (予定)

①所属②目的③期間④訪問先
Peng Shi-ping (彭軾平)
①中国・江西医学院・泌尿外科
②主任教授③尿路悪性腫瘍の臨床的研究④90. 2. 6から6カ月間⑤泌尿器科講座

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3
①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

リサーチビクター

①アメリカ オハイオ州
②「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

福岡大学医学会 例会の報告

第22回例会
日時 平成二年二月十四日(水)
午後四時三十分~五時四十分
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

座長 大島 健司 教授
1. 「外科的顎矯正について」
講師 歯科口腔外科学 福田 仁一 助教授

2. 「マクロファージの機能」
講師 微生物学 永山 在明 教授

「F₂の二重刺激による変化—回復曲線について—」
③89. 4. 30. ④4. ⑤3

編集後記

医学会ニュース二号をお
届けする。前号に、将来構想
フォーラム委員会の立場から
三好医学部長の報告があった
のを受けて、本号では、新進
気鋭の西丸、有馬両教授から
自由な立場での原稿をいただ
いた。お二人の熱のこもった
発言が、前号ともども、会員
諸氏への創造的な刺激になれ
ばと願っている。好評の『親
心・子心』は、今回、浅川助
手にお願した。なお、今回
は掲載する原稿が多すぎて、
新刊紹介をはじめ教員紹介、
海外報告、学内留学者の紹介
などが次号まわしとなった。
わが医学部の活動の盛んなる
を示すサインであって喜ばし
いことであるが、掲載予定者
には甚だ申し訳なく、心から
お詫を申しあげる。(US)